



韓国全原発視察ツアーに参加して

作成者：東北ヘルプ 川上直哉

作成日：2013年7月29日

2013年6月24日からの一週間、韓国の金容福博士のお招きと励ましに促され、東北ヘルプを代表してツアーに参加させていただきました。皆様の御厚誼を懐かしく思い出しながら、一筆の感想を申し上げます。

私たちは、被爆地に生きているものと、最近心がけて言葉にしております。もう、被災地ではない。被爆地である。そのことの意味を、噛みしめています。

先週、福島第一原発の爆発事故現場から、湯気が上がっていることが報道されました。500ミリ(!)Sv毎時を超える数値が示されました。SPEEDI は放射性ヨウ素がいわき市に向かって流れ出た可能性を告げました(その予想は外れたようです)。想像を超えるレベルの汚染水が、大量に見つかりました。すべて、この一週間の出来事です。

先週末は、川内村の中にある仮設住宅を訪問しました。原発爆発事故現場から25キロ程度の場所。空間線量は仙台と変わらない。そこでは家庭菜園を行い、その収穫物を食べている。そこから30分車で海へ進むと、ガイガーカウンターはひたすら警報音を鳴らし、1マイクロSv毎時を超える数値を示す。でも、仮設の人々は、放射能の「ほ」の字も語らない。帰路、郡山駅に寄ると、駅前で突然ガイガーカウンターが警報音を鳴らす。0.4マイクロSv毎時と表示される。でも、大雨の中、誰もマスクもしない、大都市の様子。

韓国で、私たちが見たものは、この被爆地の延長線上にある風景でした。核発電施設＝原子力発電所は、この世界を痛める。しかし、私たちは生きていかなければならない。「皆、すぐに福島から立ち退くべきだ！」と居丈高に語る声は、生きねばならない現実の痛みを、ひどくする。では、いったい何が語れるか。何を語れるか。言葉を選ぶ。選ぶべき語彙が足りない。——そうしたことに消耗する日々です。

今私たちは、都市部で被爆するということは、言葉を失うということであると、知らされています。韓国では、被爆二世・三世の運動に触れました。その背景にある日本の被爆者の現実も、青柳さんから教えて頂きました。その延長線上に、被爆地・福島を思います。数十万の人々(その中には、私たち夫婦と私の娘たちも含まれるでしょう!)が、被爆した。その子どもたち、そしてその子どもたちが、被爆の影響を受ける。その規模の大きさを思います。

言葉を失っている自分に気づきます。

皆様とツアーに参加したことが、言葉を失っていることに気づききっかけとなりました。そして私は、新しい言葉を探し始めたのです。ソウルでは、金博士と2時間も語らう機会を得ました。「神の庭が痛んでいる」ということを、私たちは語り合ったのです。

今、先週見た1マイクロSv毎時を超える山の様子を思い出します。そこには、木々に緑が生い茂り、セミが大きな夏の声を上げ、そして鬼百合が群生して咲き誇っていました。

私たち人間が汚した大地を、神様はこんなに装ってくださる。「ましてあなたたちに！」と、イエスが語った言葉を思い出します。もう一度、元気を取り戻し、言葉を取り戻して語りだそうと思います。

今、被災した被爆地で、そんな感想を抱いています。

(おわり)